文藝大阪

第1集

昭和三十一年二月十日印刷
昭和三十一年二月十五日発行

懸賞入選作発表

フローベール論……野間宏……(79)

小説の頽落……小久保実……(88)

詩佳作10篇

落日（野原光輝）……(31)

ながれ（清水正一）……(40)

村（亀山一夫）……(47)

卵から（中沢伸二）……(62)

職安にて（藤田さえ）……(72)

乞食（武内健）……(82)

千里丘陵にて（多胡比左志）……(106)

くされ犬（原貞三）……(124)

秋の構図（古川彦二）……(132)

運河にかかった町（清水正一）……(142)

望展

大阪の芸能界……（芸能）……長沖一……(91)

土は肥えている……（詩）……小野十三郎……(92)

ラジオ・ドラマ雑感……（放送）……阪中正夫……(93)

関西の同人雑誌について……（文学）……富士正晴……(95)

市民文化祭協賛

短歌……(59)

俳句……(66)

川柳……(77)

大阪3人男

上田秋成……(13)

近松門左衛門……(36)

井原西鶴……(147)

—よみもの—

「夫婦善哉」と織田作之助の手紙……吉井栄治……(99)

歌舞伎の見方……瀬川健一郎……(103)

新聞小説と作家・落穂集……X・Y・Z……(111)

大阪に於ける新人群……(87)

関西同人雑誌クラブについて……(90)

大阪の主な高校文芸雑誌……(98)

書籍雑誌発行部数……(102)

一九五五年の文化賞……(128)

チップ……稲畑太郎……(113)

外人部隊の一兵士……石浜恒夫……(114)

棋士と縁起……熊谷達人……(116)

職場と文学……織田喜久子……(117)

私は大阪に帰った……田中克己……(118)

フェアリーテイル……阪田寛夫……(120)

夏の夜……鬼内仙次……(129)

徳丸と僕と……吉田定一……(138)

（座談会）應募作品あれこれ……阪田寛夫・鬼内仙次・瀬川健一・吉田栄治・吉井治一郎……(148)

表紙画「門」について……宮本義雄……(57)

文芸大阪の生れるまで…………(156)

カット　石井元・川島昇太郎・池本竜夫・伊藤歳夫・神戸繁夫・木梨アイネ・坂本昌也・甲木永二

題字によせて……榊莫山……(68)

編集後記…………(156)

ヒゲ剃り後に

★ 生々した男性美をつくる
★ 爽快でヒゲ剃りがたのしい
★ 美容衛生剤 G—11 配合

お化粧前に

明色アストリンゼンは科学的作用でヒフを引きしめ、お化粧に最も適した状態にしますから、お化粧が美しく出来、化粧も長もちします。 定価九十円・百五十円

明色アストリンゼン

私自身について云えば、多少の後ろめたさを感じながらも、サークル活動には関係していない。それは、私の属している、前衛的と目されている「山河」の若い人たちの「詩人が孤独であった時代は過去のもので、現代は、仲間と、大衆と、手をとって前進せねばならぬ」という主張にうなずきながらも、やはり自分自身の重みは、孤独の方にかかっている為らしい。それと、前述の、すぐれた子供の詩にみるような、純粋で強い詩はパチンコや安酒で憂さを紛らせるような、小市民的な都会の労働者からは生まれ難いのではないか。なまじいに多少のゆとりが、中途半端な修辞となって、不平不満をだらだらと並べる程度の、内容のミミッチさに終り勝ちなのではないだろうか。「先ず芸術作品でなくてはならぬ」と云って、果てしない議論をする程の元気も、時間もない。そこで結局、未だに、いつかはすばらしいものを書きたい、という野望をひそめて、ひとりこの道につながっているといったところらしい。

大阪にも近頃「文学学校」というのが出来て、小野さんを校長に、半期ごとに百何十人かの生徒を擁し、また「夜の詩会」は熱心な研究会を持ち既に五十何号かを刊行して、その着実な歩みで若い詩人たちを育てている。こういう風にパーセンテージは少くても、職場から一人、二人と集まった人たちが強固な集団をつくり、それが育っていることは、何といっても頼もしい。その人たちがどんなものを生み出すかということは各人の真質と努力にかかっているのだが。

ところで文学をやっていると—文学に限らず、何の道でもだが—職場の区々たる俗事に比較的超然としていられることだ。会社の中の、或は社会組織の中の地位といったものと別の、内面の世界が真実な問題なのだから、つまらぬことに大して心をゆさぶられはしない。

大学を出て新しくサラリーマンになった人たちが、次第に本を読まなくなり、サラリーマンと異性と映画の話、それから酒と世帯のことばかりに落ちていって、ヒューマニズムさえ失って行くように見えるのはかなしい。職場にあって文学に志さなくとも、すぐれた文学の愛読者であり広い人生に目を向けることを止めてほしくないと思う。

（詩　人）

私は大阪に帰って来た

田中克己

私は純粋の大阪人である。先祖が河内の秦から出て来て、市内に住みついてから三百年にもなろう。しかし私ほど大阪を知らないものも少かろう。そのせいか愛郷心が少しもなくて困った。大体、父がサラリーマンで郊外の住宅地ばかり転居してまわり、市中の行事やそれにまつわる人情風俗の面白さなどを、記憶の中に一つももたないのがその根本の理由であろう。学校も東京、卒業した時が今と同じく失業時代で、運よく大阪の中学校の教師になれたのはよいが、四年ほどで教師商売と同時に、つくづく大阪がいやになってまた東京へ逃げ出した。

これに終止符を打たせたのが、翌昭和二十年の召集である。三月十日の夜半東京が焼け、翌々日に電報で補充兵として召集、準備している中に大阪は丸焼けとなり、三月十八日の入営の日、大阪駅に着くと、市電はとまっている。駅前から天満を通り、大阪城の前まで来る途中、家はビルの焼け残り以外は何もなかったと記憶している。お城の前の公園で、母のつくってくれた握り飯といいたいが、実はその頃としてはせい一杯のメリケン粉の焼き餅を食って、包み紙を捨てるとすぐ中部廿三部隊というのに入営した。昔の歩兵三十七連隊で、向いが日本一弱いといわれた八連隊、今は日赤になっている。この日は天王寺まで歩いて四天王寺が石の鳥居だけになっているのを見たあとで、三日間、天王寺師範（今の学芸大学）に泊りまた大阪駅まで松屋町筋を歩いて、華北に向った。

ちょうどそれから十年になる。その間、除隊して二十一年に東京へ帰り、家族と会ったあと、東京の食糧難と就職難とから、泣く泣く逃げ出して関西に住みついたが故郷の大阪へ帰るのには、また勇気がいってやっと五年前にその勇気をふるい

起したわけである。

しかし住んでみると、どうも昔の大阪とはちがうようである。こっちも少しはちがっていて、兵隊以来の苦労で大阪のことは辛抱できるようになったのかとも思うが、たしかに昔の大阪とはかわっている。戦災で何もかも焼けてなくなったのだろうか。ただしどんなかわりかたかと聞かれるとちょっと困るが、かわっていることにはまちがいがない。

はっきりするのは言葉が、とりわけ女子供の言葉が標準語に近くなって来たことである。アクセントは中々変えにくいとしても「そうだす」「そやねん」の代りに、「そうです」「そうよ」の系統の方がよく聞かれる。この「そうだす」は船場コトバでは京言葉と同じく、「そうどす」だっていうことをこの間、「京言葉」の著者楳垣実先生から教えていただいたが、船場コトバどころか大阪弁が、今に少くとも人前では消え去ってしまうのではないかとの疑いが濃厚である。ながかった統制経済のせいもあって、中小企業を中心とする大阪商人も「死に死にや」そうである。この中でわずかに気を吐くのはラヂオで、大阪弁を放送するアチャコと浪華演芸とだけではないかなと思うと、愛郷心に乏しいはずの私もいくらか淋しくなるのがふしぎである。思えば大阪人であることが他郷での生活で、私にはどれだけ損になったことか。金に汚いといわれるのがいやで、先祖伝来の商人根性にむりにさからって、人前ではおごらねばならなかったり、嘘吐きの悪名を払うために、一度いったことは必ず守ることとし、そのかわり極度にお愛想をやめ、無愛想、冷淡の悪名を受けてしまったりろくなことはなかった。

よその国の人に嘘吐きといわれるわけは、このごろになってよくわかる。これは一方には大阪人が純粋の都会人だからである。始めて会って名刺を交換する代りにいう挨拶は、「家はどこそこの橋ぎわだす、お序での節にはちとお立ち寄り」といって別れ、さて相手がお立ち寄りになった時にはこちらがびっくりする。顔もおぼえてないし、どこであった何をする人かも忘れている。その顔を見て、相手の人はこの前の愛想のよかった笑顔と反対だなと怒るのである。戦後十年のこのごろでは、「ちとお立ち寄り」の御挨拶が全くなくなったのに気がつく。「まずいですけど」「粗末なもんですけど」と人に食物をすすめる時の挨拶と同じく、これら儀礼だけの挨拶は大阪のためにもなくなった方がよかった。

かように「ほんま」ばかりいうようになれば、大阪のほんまは一体なんだろう。先ず第一は昔ながらに食べ物の旨くて安いこと。大和の「茶粥」、京の「芋ぼう」よりはたしかに大阪の食い物の方が、種類も多く、そのうえ安価である——ここで気がついたが、大阪人は必ず値段のことをいう。江戸っ児ならこれは絶対にしないことなのだが、良くて、しかも安くてというのは、大阪人にとってどんなにうれしいことだろう。高い金を出して良いならあたりまえなのだ。そして安いということは、それを発見するということは、なんという喜びなのだろう。このよろこびがわかりまへんかと私もまともに抗議したくなる。血はあらそえないものである。

大阪の良いところの第二は、人情に厚いことである。全国各地から一千万に近い人間の集っている東京は、それ自身植民地で、もう人情などはその下町が焼けた時かぎりなくなった。それに反し大阪では世帯が小さいせいもあろうが、人情が全然なくなってはいない。もちろんここでも昔よりはうすくなったろうが、東京のようにまったく「秋ふかし隣は何をする人ぞ」式にはなっていない家庭劇の今だにはやる理由でもある。そのかわりこの人情の基盤をなす封建的な倫理道徳の重さに苦しむ青少年男女や、使用人も多いことと思うが私自身はもう中年で孝行をする相手の父母はあるが、私を叱る元気も残っていない。先生は東京においでだが、ここまでは目がとどかず叱っても来られない。自身は使用される立場にはいるが、その中で一番自由な楽な教師商売で干渉されることもない。反対に教へ子たちには、盛んに人情味を発揮して、叱り、なだめ、すかし、おどししている。怖いことである。この間、息子の手記をぬすみ見したら、「父には不快を感じる」と書いてあった。彼もたぶん東京へ逃げ出して、親のさしたがらない文学や恋愛をしたくなっていて無意識な圧迫を感じているのであろう。

（帝塚山学院短期大学教授）

新生活は地道な貯蓄で

三和銀行

大和銀行

富士銀行

住友銀行

吾々の協会が畑ちがいの文芸雑誌の刊行を思い立ったのは、三年ほど前のことであります。協会の機関誌「大阪人」の座談会に、藤沢さんの御出席をお願いした席上同先生から、大阪には文学を志す若い人が多いにもかかわらず、その人達の作品を発表する場というものがない。同人雑誌は相当あるにはあるが、大ていは三、四号でつぶれてしまうてあとが続かないようである。幸い協会はなまじっか今までこの方面に関係がないからかえって好都合だし、一つやってみてはもらえないか。私も選者として援助するし、場合によっては紹介の労をとるから川端康成、野間宏、その他大阪と関係の深い作家にも相談して見てはどうか、という意味の発言があり、御親切に紹介状まで書いて下さった。しかし当時は協会の基礎も弱く、従って自信もなく、やってみたい希望は持っていながら、そのままになっていたのでありますが、その後世の中も漸く落ち着いて来たし、吾吾の方も多少人的に整って来た。又協会にとって一見無縁と思われる文学活動も、ひいては大きい意味で市政の文化的発展に寄与するものであるとの確信を抱く様になりましたので、思い切ってやってみることにしたのであります。そこで七月の中ばに藤沢桓夫、長沖一、小野十三郎、阪中正夫先生などにいま一度相談をしたところ、双手を挙げて賛成され、何分の援助をおしまないと云って非常に激励された、更に鬼内、阪田、瀬川吉田、吉井の新進有能の人たちからも詮衡、編集など実際面で援助をうけることになったのであります。

一方こういう方面に非常に理解のある中井市長や市の教育委員会財界の各方面の人たちから物心両面に亙って非常な厚意と援助を受けとも角も茲に第一回の選集を出しうる運びとなったのであります誠に感激の外はない次第であります。それにしてはいかがこれであります。それにしてはあまりにお粗末で御期待に反するものであるかも知れませんが、今後二回三回と気ながに回を重ねてやって行くうちには、それはそれなりに多少でもこの方面にお役に立つのでなかろうか、きさな云い分ですが地に落ちた一粒の麦とならないであろうか、というのが私の期待であります、幸に今後も皆さまから御厚意と御援助をうけることが出来ますなら、私たちも不敏をかえり見ずこの仕事を続けて行きたいと思っています。（授賞式席上における水内事務理事の挨拶より）

本協会主催の大阪市民文化祭協賛、第一回新人創作文芸懸賞募集の入選者に対する授賞式は、旧ろう二十一日（水）午前十時から、入選、準入選並に佳作の作者三十余氏を迎えて、栗本協会々長、水内事務理事立合のもとに、北区役所二階会議室に於て行われたが、写真は、同授賞式後ストーヴを囲んで懇談中の授賞者。左より、長島、松田、鈴木、平井、桜本、磯田各氏並に栗本会長、水内事務理事。

編集後記

◇……先ず予定の発刊日が色々の事情で遅れ多くの方々に御迷惑をおかけしたことをお詫びします応募作品が予想以上に多く、為になにかと手間取ったのでしたが、本誌に寄せてくださった多くの方々の御厚意には、心からのお礼を申しのべます。そしてさらに第二第三集とすゝむにつれてなお多くの力作をお寄せ下さるようお願いします。

◇……本誌は大阪の文学が大きく育つことをその希望として発足しました。本誌は大阪及び近郊の有望な新人達に紙面を解放し、その人達の発表舞台となることを念願としています。すなわちこゝに第一回の入選作品をもって、紙面をかざったわけです。文学に関心を寄せられる方々の御支持をお願いするゆえんです。

◇……第二集以降、如何なる方法によって刊行をつゞけていくか目下企画立案中ですが、いつの場合でも新人の中から選ばれた作品をもって誌上をかざり、あくまで新人達と共に進んで行きたいと思っています。こうして本誌が、沈滞勝ちの大阪の文学のために、多少なりとも新しい風を注ぐのに役立つことができますならば、本誌の使命は果されたわけであり、これ以上のよろこびはないと思います

◇……幸に本誌は各方面に多くの支持と共感を得ることができました。本誌が今回ようやく陽の目を見ることができましたというのも実はこのような温い援助があったからであります。さらに内容の充実をはかり、大阪の風土に根をおろした、文化の香りが高く匂いだようなものになるよう努力を誓うゆえんです。

◇……大阪からは多くの文学者が生れ育ちました。その文化の伝統をうけついで、本誌は高く飛躍し大きく成長することを信じています。そのための努力と精進を私達は怠ってはなりません。

◇……最後に、発刊の遅れたことについて重ねてお詫び申しあげますと共に、本誌の誕生に温い目を注いで下さった多くの人たちに、心から御礼の言葉を捧げます。

文芸大阪

第1集

定価130円

昭和三十一年二月十日印刷
昭和三十一年二月十五日発行

編輯兼発行人 坪木操

印刷所 共成社印刷株式会社

発行所 大阪都市協会
大阪市北区曾根崎上一丁目三七
電話（34）六五〇二番
振替口座大阪一八八五八番